



No.17 2001.4.

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目 次

土木史ニュース	『日本の近代土木遺産—現存する重要な土木構造物2000選』	馬場 俊介	1
フォーラム	よみがえった沼 - 国土史の象徴としての風景 -	中村 良夫	2
地域のニュース	長崎出島オランダ商館の復原	横村 宜江	3
行事案内	第6回土木の文化財を考える講演と討論の会		3
海外土木史	Antonie Picon教授講演会報告	橋本 光行	4
関連団体ニュース	犬吠埼プラントン会について	仲田 博史	5
学会の動き	第21回土木史研究発表会の案内・プログラム		5
	土木史研究委員会報告	鈴木 圭	7
土木史関係図書	『日本の近代化遺産-新しい文化財と地域の活性化』他	横松 宗治	8

土木史ニュース

『日本の近代土木遺産—現存する重要な土木構造物2000選』

平成12年度の土木学会出版物となる『日本の近代土木遺産—現存する重要な土木構造物2000選』は、平成13年2月3日に脱稿し年度内の刊行に向けて事務的な手続きに入った。平成3・4年度の中部5県調査、平成5～10年度の長きにわたった全国調査の結果がようやく日の目を見ることになったわけである。それも、学会出版物という最も望ましい状態で。

土木遺産リストの公表は、全国調査を企画・支援する近代土木遺産調査小委員会の評価担当委員グループで将来目標として議論されたことはあったが、具体的に動き出したのは、平成10年度の土木史研究委員会の幹事会の活動方針の一つに採択されたことが発端となった。経緯は『2000選』の編集後記に記してあるので割愛するが、最終的には当時の岡村 甫会長の賛同を得て「土木学会選奨土木遺産」賞の新設とそのバックボーンとなる本書の刊行が認められるに至った。

『2000選』刊行の背景には、「土木遺産は社会的資産としてほとんど認知されておらず、それが土木遺産の安易な取り壊しにつながっている」という現状認識があった。もし、土木遺産の管理者とそれを利用する社会の双方に、「この土木遺産にはこの程度の価値がある」というリストを伝達すれば、管理者側は壊すことに慎重になるであろうし、社会の方（マスコミ、住民）も保存に伴う余分の出費に寛容になってく

れるであろう。リストを公表した結果、そこから漏れているものには取壊しの口実を与えてしまうのではないかという指摘はあった。しかしそれでも、いま早急に周知しておく方が、長い目で見れば土木遺産の保存と活用により有効であると判断し公表に踏み切ることにしたわけである。そして、いっそ公開するのであれば、土木学会のネームバリューを借りることが最も効果的なわけで、学会出版物として刊行できたことは最良の結末であった。

『2000選』の編集については、同書の「リストの分析」に詳しく記したので再び割愛するが、おおまかに言えば、学会の全国調査を出版物の形にまとめたのではなく、中部5県調査を加えた全国調査を一つの柱に、文化庁の進める近代化遺産の各道府県調査をもう一つの柱とし、それに地域別・テーマ別に出された数多くの現状報告書を合算することで新たな重要土木遺産リストを作成したものである。そんなまわりくどいことをしたのは、学会出版物という形で、土木史研究委員会の名を背負って刊行する以上、内容にはそれ相応の信頼性が要求されるものと考え、筆者の満足するまで取捨選択と吟味を繰り返した結果である。その過程の中で、小西純一、小野田滋氏をはじめとする土木史研究者、各教育委員会、土木関係のさまざまな機関には本当にお世話になった。

(岡山大学 馬場 俊介)

よみがえった沼

— 国土史の象徴としての風景 —

中村 良夫

(京都大学大学院教授)



御所沼といっても知る人は少なからう。渡良瀬川の左岸、茨城県古河市の町はずれにある小さな沼である。

古河公方の館がこの沼のほとりにあったと言え、あるいはうなずく向きも多いかと思う。御所沼という地名もそれに由来するらしい。応仁の乱の少し前、鎌倉の関東府をとりしきる上杉一族の手から逃れた足利の一統が江戸の初めまで、汀の疎林で寂寥の日々を送ったのだった。

猿島台地の西の縁が指先のように枝分かれしてにわかに傾き渡良瀬の低地へ落ちていく。そこに、ヒトデ状に食い込んだ美しい谷地の沼がある。かつてそう呼ばれる沼があった、と言うべきか。それが御所沼である。おそらくこの沼は、縄文海進期に関東の奥まで押し入った古東京湾の入り江の名残であろう。

その昔、出水に悩まされたこの沼辺の生活は決して楽ではなかったが、その面影が人々の心に焼きついている。赤城おろしに凍つく岸辺の里も春ともなれば桃の花が舞い、水鳥の卵を求める子らの田舟が芦の繁みに分け入るのだった。やがて夏。ジュンサイ摘みの娘たちの歌声が湖面に弾むと、クイナのたたくようなものうい声がそれに和した。

昭和24年、食糧増産のかけ声とともに、沼は埋め立てられて田となり、武陵桃源風の沼の歴史は幕を閉じた。太古の面影をたゝえたこの沼が消えてしまったのだ。

ところが誰もが考えなかった足早な経済復興のおかげで農業生産も増加の一途をたどり、やがて米がとれすぎて困るという神武以来の椿事が出来た。そのあげくの減反政策である。こうしてせっきくの美田もやっかい者となり、埋められることになったのだ。

昭和48年、御所沼は公園区域の指定を受け、やがて桃の林も育ってきた。その上うれしいことに平成元年、沼の復元計画が再確認され、ようやく平成7年3月、市民の願いが実って沼の一隅が往年の輝きを取り戻したのだった。縁あって私は、景観工学という立場から復元のお手伝いをしたが、国土史に翻弄されついによみがえったこの沼の強運を祝し、盃をあげたい気持ちだ。

渡良瀬のほとりにはかつて大小無数の沼が点

在していた。その大半が幻と化したのが、たとえば近くには瀬沼という小字名が残っている。カワウソが棲んでいたのであらうか。哀れむべし、この沼もまた大正時代には埋められてしまった。

しかし、湿地の水田化や埋め立ては今にはじまったわけではない。弥生時代このかた、日本人はこうにして文明を築いてきたのだが、今や国中でせっきくの美田が見るかげもない。転作どころかゴミ溜めになろうとしている。あまりに心ない仕打ちではないか。

それならいっそ、沼を取り戻し、しゃれたレストランやカフェでも添えてコミュニティ・リゾートにしてはどうだろう。そっけない公園を超え、人生の舞台を作るつもりで市民の入会地（コモンズ）をつくろう。日本は今そういう時代にさしかかっている。水辺は生命の回復が速い。御所沼はもう鳥やトンボの楽園である。昔なつかしいタナゴも戻ってきたとか。

水はけの悪い渡良瀬左岸の台地下に溜まったこの沼は、古河周辺の表面排水を自然に貯留する役目を担っていた。

今度、公園として復元したこの沼も、高水時には貯留機能をもたせるように設計してある。問題は水質である。市内から入る悪水は平常時はバイパスされるので新鮮な水は雨水しかない。酸素を補充する水の循環装置三組と、水質悪化に備えた50メートルの深井戸一本を用意したが不安は残っている。自然復元の技術的課題を今後に課した形になった。

(1996年7月、「This is 読売」への掲載文を基に大幅改訂し、寄稿した。)



公園として復元された御所沼

地 域 の ニ ュ ース

長崎出島オランダ商館の復原

長崎の出島は、江戸幕府が長崎の有力町人25人に築造させた人工の島である。1634(寛永11)年に着工し1636年に完成。面積約1.5ha。ポルトガル人が収容されたが、3年で追放。空き家になった出島には平戸からオランダ商館が移され、幕末まで西洋に開かれた唯一の窓となる。

長崎湾に浮かぶ扇形の島として知られる出島であるが、明治期以降の埋立てで、すっかり内陸化し街に埋没していた。

埋もれた出島を、江戸時代の姿に復原しようと、長崎市は昭和20年代から土地の公有化(平成11年度末で94.5%)と史跡整備に着手。ミニ出島の設置、出島の範囲調査と顕在化、明治時代の建物を利用した資料館やガイダンス施設の設置などを行ってきた。昨年、日蘭交流400年という節目に、19世紀初頭の建物5棟と出島の中央通り、石垣などの復原工事が完成し、公開されている。

オランダ商館時代の出島の建物は、約50棟。長崎町人が建て、オランダ商館から賃貸料をとっていた。建てたのは長崎の大工で、和風の建物である。オランダ人は畳敷きの部屋に日本の唐紙を壁紙のように貼り、ペンキを塗り、洋風の家具を持ち込んで暮らしていた。復原建物には和洋混在の不思議な空間が再現されている。

出島の中央通りには、豆砂利を叩き込んだ舗装がされ、道の中央には市内風頭山で採れる輝石安山岩の板石敷き、両側には瓦敷きの側溝が

復原された。舗装と側溝は発掘調査で明らかになった。

石垣は、出島の南側と西側の一部を復原。当初の野面石積み、時代の下る切石積み、荷揚げの増築の過程などを見ることができる。

ようやく江戸時代の姿が見え始めた出島。しかし、史跡内には明治時代の洋館や三角溝と呼ばれる居留地時代の側溝なども遺る。特異な場所ゆえに交流の地として栄えた出島。次の時代に何を伝えるべきか、文化遺産としての価値を守りながら今後の復原が進むことを期待する。

(波多野純建築設計室 横村 宜江)



(写真) 扇形の名残に見える石垣は、明治時代の中島川拡幅工事によるもので、技師はオランダ人のデ・レイケ。江戸時代の出島は川の中程までであった。

行 事 案 内

第6回土木の文化財を考える講演と討論の会

日時：6月16日(土) 13:00~16:30

場所：東京大学構内 山上会館

文京区本郷7-3-1 TEL03-5841-2330

講師：高橋裕(東京大学名誉教授)

前野まさる(東京芸術大学名誉教授)

参加費：一般1,000円 学生500円

主催：土木の文化財を考える会

問い合わせ先：

TEL03-3988-7733(前島郁子)

FAX03-3988-7747

発行協賛費のとりやめについて

読者各位

土木史フォーラムN0.16において、土木史フォーラム発行協賛費に関するご協力の御願いを致しましたが、その後、公認会計士や他の委員会との調整を図った結果、土木史フォーラム編集小委員会で独自に協賛費を頂くことは、現状では困難であることが判明致しました。

その大きな理由として、土木学会は公益法人であるため、有料で販売すると収益事業となり、収益を調査研究費等のためにストックする

ことは、税務上望ましくないということです。

したがって、土木史フォーラムはこれまでと同様に発行して参りますが、学会員以外の方から発行に関する御協力を頂いた場合には、何らかの形で謝意を表する方向で考えております。

今後とも、読者皆様の温かい御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

土木史フォーラム小委員長 窪田 陽一
同 幹事長 鈴木 圭

Antonie Picon教授講演会報告

去る1月9日、フランスのエコール・ナショナル・デ・ポンゼシヨセ (Ecole Nationale des Ponts et Chaussées以下ENPCと略す) より Antonie Picon教授が来日し、大成建設新宿センター大ホールにおいて、「A Feeling for the Past/Engineering Education and History at ENPC」と題する講演会が行われた。これは土木学会土木史研究委員会および景観・デザイン委員会が共催で「土木技術者と歴史感覚～Antonie Picon教授招待記念シンポジウム～」を開催したものである。Picon教授は1981年にENPCを卒業後、1991年にフランス高等社会科学学院で歴史学博士を取得し（最優秀学位論文賞受賞）、同年よりENPCにて「エンジニアと技術の歴史」講座を担当し、土木史に関する執筆や活動に対しても高い評価を得ている。

講演の内容は以下の3つのパートから構成されていた。

- ① The Rise of the Humanities and Social Sciences in Engineering Education
- ② Civil Engineering History, Tradition and Innovation
- ③ The Place of History at ENPC

まず最初のパート①では、近年フランスのみならず世界的に工学(engineering education)における歴史教育(history)の重要性が認識されてきているとの説明があった。すなわち、急速に発展する経済や技術、また複雑かつ不透明な社会に対応できる技術者の育成のためには、単に技術教育だけでなく、歴史を含む人文・社会科学教育(humanities & social science)が大きな役割を担うことが期待されていると主張された。次に②のパートでは、豊富なスライドによる土木技術(civil engineering)の実例を通じて、土木史と社会との関わりについて話をされた。ここでは特に歴史は過去(past)と現在(present)を結ぶもの、すなわち土木史は伝統(tradition)と革新(innovation)をリンクするもので、土木技術教育には欠くことができないものと強調された。また最後のパート③では、Picon教授が勤務されるENPCにおける土木史教育のこれまでの取組みや、今後の課題についても報告された。

本シンポジウムでは、Picon教授の講演に引き続き、高橋裕東京大学名誉教授による「日本における土木史研究の歩み」、大熊孝新潟大学教授による「新潟大学における土木史教育の実

践」と題した講演が行なわれ、我が国における土木史研究と土木史教育の現状について紹介があった。またシンポジウムの最後には、篠原修東京大学教授をコーディネーターに上記3名の講演者と鈴木博之東京大学教授(建築史)をパネリストとして、「土木技術者と歴史感覚」をテーマにしたパネルディスカッションが行なわれた。このパネルディスカッションでは、日・仏における土木史教育の比較や土木・建築における歴史教育の違い等を中心に、会場の聴衆者も加えて活発な意見交換が行われた。21世紀の幕開けにあたり、このようなシンポジウムが開催されたことは、我が国の土木技術教育のあり方を見直すだけでなく、今後の土木技術者の役割や倫理を議論する上でも非常に有意義であったと言える。なおPicon教授の講演内容に関する日本語訳が近々作成される予定である。

(NKK 橋本 光行)



講演会の様子

 関 連 団 体 ニ ュ ース

犬吠埼ブラントン会について

犬吠埼ブラントン会(代表幹事仲田博史、会員18名)は、犬吠埼灯台とその設計者R. H. ブラントンに関心を持つ銚子市民が中心となり、現役の近代化遺産ともいえる犬吠埼灯台の多面的な研究と「日本の灯台の父」と称されるお雇い外国人ブラントンの人物と業績をたどり、それらを顕彰し、あわせてまちづくりへの活用を考える会として一昨年結成。そのアプローチの特徴は、建造物としての灯台そのものよりも、灯台を人間の行為の場ないしは所産と捉え、築造・保守・地域との係わりのなかでお雇い外国人と日本人技師・看守等が展開したきわめてダイナミックな洋式灯台にまつわる技術移転プロセスを明治期日本の近代化過程とオーバーラップさせながら考察するところにあります。

さしあたり活動期間を1999年から2001年までの3年間とし、これまで三つの目標、1. 犬吠埼灯台とその設計者ブラントンについての「調査研究」、2. 灯台のあるまち及び灯台職員との「交流」、3. 銚子市の主唱する灯台記念館建設計画実現への「提言」を掲げ活動しております。

なお、現段階では活動目標の延長線上に描いた個人的な夢の次元に過ぎませんが、1. 紙上博物館として『新・犬吠埼灯台史』の刊行、2. 灯

台のあるまちとのネットワーク：『日本ブラントン協会』結成に向けて地方から発議、3. 灯台記念館に犬吠埼燈台初代レンズの里帰りとブラントン顕彰オブジェ設置の実現等々と共に、願わくはブラントン没後100年にあたる本年4月24日にロンドン墓参とスコットランド灯台視察の旅をしたいと夢を膨らましています。

(犬吠埼ブラントン会 仲田 博史)

犬吠埼ブラントン会活動年表

1999.5月	発足記念講演会 伊王島灯台の歴史と日本最初の灯台資料館開催
6月	静岡県御前埼灯台視察
9月	博物館明治村に展示中の犬吠埼初代レンズを日帰り視察
10月	会員による犬吠埼灯台旧吏員退息所の復元図発表
11月	犬吠埼灯台初点灯125周年を灯台職員と共に灯台型ケーキとシャンパンで祝うミニ式典開催
2000.4月	99回目の命日に「ブラントンを偲ぶ会」を開催、会員による「漁師と犬吠灯台」発表
7月	公開灯台シンポジウム開催、基調講演：日本の灯台の父R.H.ブラントン—その人と業績(講師 堀勇良先生)、パネル・ディスカッション：犬吠埼灯台と銚子—ブラントンの遺産をどう活かすか
10月	『犬吠埼燈台史』(昭和10年刊行)を復刻出版
2001.1月	長崎県伊王島灯台視察
2月	公開灯台シンポジウム報告書『犬吠埼燈台とR. H. ブラントン』刊行

 学 会 の 動 き

第21回土木史研究論文発表会

- 主催：土木学会(担当：土木史研究委員会)
- 期日：2001年6月2日(土)～3日(日)
- 会場：金沢大学工学部
(石川県金沢市小立野2-40-20、TEL:076-234-4654)
交通アクセス：金沢駅西口4番、5番乗り場からバス約25分「金大工学部前」下車。
詳細は下記URLをご参照下さい。
<http://www.kanazawa-u.ac.jp/univ/access.html>
- 参加費等：会員、非会員：2,000円
学生会員：1,000円 論文集：6,000円
当日会場にて申し受けます。
- 懇親会：
 - ①日時：2000年6月2日(土)18:00～
 - ②会場：金沢大学工学部生協
 - ③参加費：3,000円程度を予定
 - ④参加方法：当日会場にてお申し込み下さい。

6. 論文集「土木史研究21」事前販売のお知らせ
発表会当日の議論をより活性化することを主たる目的として、発表会開催前に、論文集「土木史研究」(4月末発行予定)を販売致します。ご希望の方はFAXまたはE-mailにて、「氏名、送付先(〒、住所、所属名、TEL)、購入部数、支払方法」を明記の上、下記あてお申し込みください。なお、論文集は1冊6000円(+送料740円)です。

申込先：土木学会土木史研究委員会(担当：丸畑)

FAX:03-5379-0125

E-mail:maruhata@jsce.or.jp

申込締切：2001年5月11日(金)着分まで

7. プログラム：プログラムは2月末時点のもので、発表会当日のものとは異なる場合があります。また、土木史研究委員会ホームページでもご覧になれます。

<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>

◆6月2日(土)

時間	第1会場	第2会場
9:50	開会挨拶 土木史研究委員会委員長 佐藤 馨一	
10:00	都市Ⅰ】 司会 佐々木 葉 (日本福祉大学)	歴】 司会 佐藤 馨一 (北海道大学)
	A01 鎌倉地方の社寺における造園工事の歴史に関する研究―建長寺・永福寺・鶴岡八幡宮・長勝寿院・報恩寺について― 三浦彩子 (早稲田大学)	A03 近世広島県鞆港の港湾整備と施設群の現存状況に関する研究 市古太郎 (日本大学理工学部)・植松弘幸・長野隆人・金子慎太郎・伊東孝
	A02 近世城下町大坂の船場・島之内地区における城下町設計の論理 阿部貴弘 (パシフィックコンサルタンツ(株))・池田佳介・篠原修	A04 野蒜港港口突堤の崩壊過程に関する研究 宮地豊 塩釜港湾工事事務所)・島崎武雄・西山三朗
	B01 近世城下町の都市的変貌過程に関する研究 田中映 (日本道路公団)・新谷洋二	A05 外貿コンテナ埠頭の管理運営体制に関する一考察 清野馨 (石狩湾新港管理組合)・紅村文雄・堂柿栄輔・五十嵐日出夫
	B02 東海道品川宿六行会のまちづくり 幕末～昭和戦前期)―自立的地域まちづくりの歴史的考察― 昌子住江 (関東学院大学)	B04 富岩運河ととやまの土木史 白井芳樹 (富山県企業局)
12:00	B03 旧国鉄・渚滑線の形成過程と路線効果 横平弘 (道都大学)	B05 長崎港常盤・出島地区計画における屋外博物館の計画 横松宗治 (株)日本設計)・後藤恵之輔・林一馬
13:00	都市Ⅱ】 司会 加藤 仁美 (東海大学)	教育・人物】 司会 伊東 孝 (日本大学)
	A06 明治期の神戸における市街地整備事業の着手及び収束手続き制度の成立に関する研究 小原啓司	B11 明治初期における攻玉社陸地測量習練所への遊学―中館弘之助の道中記より― 榊山清人 (財)全国建設研修センター)・長谷川博
	A07 電柱整理に焦点をあてた都市計画に基づく共同溝計画に関する研究 鈴木悦朗 (服部エンジニア(株))	B12 志免地域の堅坑に関する史的研究 畑岡寛 (九州共立大学)・田中邦博・市川紀一・亀田伸裕
	B06 明治期金沢市の耕地整理 新保明夫 (株)国土開発センター)・安達實	B13 北海道官設鉄道と札幌農学校出身の鉄道技術者 原口征人 (北海道大学)・日野智・今尚之・佐藤馨一
	B07 八郎潟干拓事業の成立過程に関する一考察 小林智仁 (日本大学大学院)・藤田龍之・知野泰明	B14 電力土木の歴史―第2編電力土木人物史 (その9)― 稲松敏夫 (稲松技術士センター)
	B08 社会的価値観の変遷と都市形態の変化 鈴木聡士 (北海学園大学大学院)・五十嵐日出夫	B15 The Hennebique Company : An Early Industrialization for the Reinforced Concrete(1880-1914) 本田泰寛 (熊本大学大学院)・小林一郎・Michel
	B09 日本陸地測量部の韓半島測量足跡と韓国の測量認識 李鎮昊 (韓国地籍博物館)・全炳徳	B16 技術の学術的確立と役割―科学史研究記録と実状から考察― 吉原不二枝
15:30	B10 東京における都市交通管理対策の経緯と考察 秋山尚夫 (警視庁交通部)未定	B17 特異点探索 ―フィールドワークとしての土木史・景観教育― 小林一郎 (熊本大学)・星野裕司
15:45	橋・構造物Ⅰ】 司会 小林 一郎 (熊本大学)	土木遺産】 司会 北河 大次郎 (文化庁)
	B18 西田橋の復元施工と保存活用 長谷場良二 (鹿児島県土木部)・橋本孝・関見・吉原進	A08 近代土木遺産」の評価に関する一考察―発電用ダムの「近代遺跡」調査を事例として― 堀川洋子 (日本大学大学院)・伊東孝
	B19 西田橋の移設復元におけるデジタル情報の活用 西村正三 (株)計測リサーチコンサルタント)・関見・長谷場良二・吉原進	A09 明治期の砲台跡地にみる近代遺産の保存・活用について 星野裕司 (熊本大学)・小林一郎
	B20 九州の石造アーチ橋について 坂田力 (福岡大学)・市川紀一	B24 古墳 (関東地方)に関する工学的視点からの考察 田中邦熙 (休更津工業高等専門学校)
	B21 石橋への誤解と環境適応性について 逃目英正 (ほつま工房(株))・吉原進	B25 岡山市街地の水路に残る石造構造物の悉皆調査 馬場俊介 (岡山大学)・樋口輝久・青木厚実・河原輝明・砂野有紀
	B22 明治期金沢市内の木橋工事について 安達實 (金沢大学)・室篠・前川秀和・小堀為雄	B26 山形県にのこる近代土木遺産の地域分布とその特性について 為国孝敏 (足利工業大学)
17:45	B23 明治末期における神戸での鉄筋コンクリート橋 ―いわゆる「若狭橋」を巡って― 山根巖 (大日コンサルタン(株))	

◆6月3日(日)

時間	第1会場	第2会場
9:30	【橋・構造物Ⅱ】 司会 市川 紀一 (㈱クローバーテック)	【川・上下水道】 司会 岡田 一天 (グランニングネットワーク㈱)
	A10 上路橋の橋脚部周辺の形態に関する土木史的研究 木村雄司 (㈱ハオ技術コンサルティング事務所) 窪田陽一	A13 加藤清正による洪水制御法「轡塘」についてー浜戸川島田地先の轡塘を事例としてー 大本照憲 (熊本大学) 矢北孝一
	A11 阿部美樹志とわが国における黎明期の鉄道高架橋 小野田滋 (財)鉄道総合技術研究所)	A14 城原川流域における野越の役割と効果に関する研究ー氾濫許容型治水の実例と今後の発展可能性につ 田辺敏夫 (新潟大学大学院) 大熊孝
	A12 近代日本の橋梁設計技術および、構造解析理論の 発達について 五十畑弘 (KKK) 木田哲量	B30 石川県手取川七ヶ用水 竹村敏則 (㈱日本海コンサルタント) 北浦勝
	B27 城郭石垣断面形状の設計および構築に関する考察 森本浩行 (京都市立伏見工業高等学校) 西田一彦・ 西形達明・玉野富雄	B31 発掘記事にみる治水・利水技術の変遷に関する研究 安保堅史 (㈱サンプレス) 藤田龍之 知野泰明
	B28 土岐川における決しゅ板ダムとその歴史 茂吉雅典 (大同工業大学) 久保田稔 田鶴浦昭典・ 中村義秋	B32 足利市における近代水道の敷設過程に関する一考 察 福島二郎 (足利工業大学) 為国孝敏 中川三朗
	B29 定川掛制度の成立過程についての一考察 篠田哲昭 (北海道建設工学専門学校) 中尾務	B33 マチュピチュにおける給排水システムの衛生的・宗教 的思想 楠田哲也 (九州大学) 近藤隆二郎 原田秀樹 迫田 章義 澤田浩介 P.R.Kaulicke J.R.Zapata
12:00		B34 土木史から見た水環境に関する調査 今野辰哉 (日本大学大学院) 藤田龍之 知野泰明
12:10	総括及び閉会挨拶 土木史研究委員会副委員長 伊東 孝	

A01～A14：審査付論文、B01～B34：自由投稿論文

土木史研究委員会報告

平成12年12月1日、土木史研究委員会を開催したので、その会議内容を報告する。

1. 報告事項

・海幸橋の保存に関する要請書を東京都中央区長宛に送付。昭和2年に完成した海幸橋はこれまで、柳橋や永代橋と同様にタイド・アーチとして我が国初のランガー桁とされていたが、学会員の研究の結果、我が国初のランガー桁と判明した(特異な構造の鋼下路アーチ橋ー海幸橋について、『土木史研究』、1999年発行)。また、我が国ではめずらしいアムステルダム派のデザインであり、非常に価値の高い橋梁であることから、近代化土木遺産としての保存を要請したものである。

・古市公威博士に関連するシンポジウム「近代技術の移入と日本の発展ー姫路の生んだ土木技術者・古市公威」(主催：建設省姫路工事事務所、道路公団姫路工事事務所、兵庫県姫路土木事務所、姫路市、後援：土木学会関西支部、土木史研究委員会)が2000年11月26日、姫路市城郭研究センターに於いて開催された。

・Antonie Picon教授(仏、Ecole nationale des Ponts et Chaussées)による特別講演会を景観委員会と共催で2001年1月9日に実施した。タイトルは「土木技術者と歴史感覚」。

・13年度土木史研究会の予算130万円を申請。主な行事は、土木史研究発表会(2001年6月2～3

日、金沢大学)、全国大会研究討論会(2001年11月、熊本大学)

・平成12年度選奨土木遺産として小樽港北防波堤、帝都を飾るツイン・ゲート(永代橋、清洲橋)を始めとする10の施設に決定し、土木の日関連事業の中で支部毎に銘板の伝達式を行った。

2. 審議事項

・土木学会技術者資格制度の創設に伴う「歴史的土木構造物評価士(仮称)」について。

土木学会では、倫理規定を尊重し、専門的能力を有する土木技術者を評価し、これを社会に対し責任を持って明示することを目的として、土木学会認定技術者資格制度の検討を行っている(詳細はホームページ参照)。これに伴い、土木史研究委員会でも「歴史的土木構造物評価士(仮称)」に関する検討を開始した。検討内容は、歴史的土木構造物の調査・評価及び保存・利活用計画に関わる業務を行う能力を認定するために必要な取得条件、業務経験、試験方法等に関するものである。詳細は土木学会選奨土木遺産選考委員会で検討する。

(鹿島建設 鈴木 圭)

土木史関係図書

日本の近代化遺産-新しい文化財と地域の活性化- 著者:伊東孝 発行:岩波新書 価格:700円 出版年月日:2000年10月20日	近代化遺産の基本的な概念と、多くの内外の具体的な遺産を紹介する。都市計画における遺産の位置づけ、それらに係る市民の活動についても意義づけている。
古代の道路事情 著者:木本雅康 発行:吉川弘文館 価格:1700円 出版年月日:2000年12月1日	大化の改新以降律令期の道路事情を、中国、ローマ等と比較する。その配置は古代の都城の配置基準となり、国境、郡界ともなっていた。道路の構造をローマ道との比較を通じて、わが国の交通事情を描き出す。
建築家秀吉 著者:宮元健次 発行:人文書院 価格:2200円 出版年月日:2000年11月30日	豊臣秀吉の出自は、近江出身のワタリ（定住地を持たない技術者集団）と推測する。高松城攻めにおける水路づくりや、長浜に始まり、大坂に完成する近世城下町の計画をした秀吉を我が国の都市史上最大の計画者として、その技術のルーツも探求する。
里の石橋 445 著者:木原安妹子 発行:南方出版 価格:2000円 出版年月日:2001年3月	山口祐造氏とともに長年石橋の調査を進めてきた著者が、自身で訪ねた鹿児島県の445橋を写真とデータで紹介する。
日本のいしばし（上巻、下巻） 著者:日本の石橋を守る会 発行:えぬ編集室 価格:各3000円 出版年月日:2000年12月	日本の石橋を守る会誌。山口祐造氏が会長を務めた期間の1～66号の復刻本である。
復刻版犬吠埼燈台史(注) 編集:犬吠埼プラントン会 発行:犬吠埼プラントン会 価格:1000円 出版年月日:2000年9月30日	原本は昭和10年銚子観光協会が還暦犬吠埼燈台祭を記念して出版したもの。灯台の沿革や業務のみならず、生みの親プラントンと愛犬の話、レンガをめぐる中澤技師とプラントンの対立、文明開化の光芒に驚いた地元民、皇族や著名人の訪台など、灯台にまつわるエピソードも紹介されている。

注) 復刻版犬吠埼燈台史の入手については、以下の郵便振替口座に本の代金と送料の合計金額を振込み、入金連絡が届きしだい発送すること。
本の代金:1冊1000円(消費税込) 送料:1冊=210円、2～3冊=310円、4～5冊=340円
振替口座番号:00190-0-557826 口座名義:犬吠埼プラントン会
〒288-0072千葉県銚子市弥生町2-35 仲田博史方 電話0479(25)2511

編集後記：今回はコラム「文化財ニュース」がごさいませんでした。実際には11月に3件の土木構造物に対して答申がありましたが18号にて紹介させていただきます。また地域のニュースは1つのみの紹介となりましたが、皆様の情報提供をお待ちしております。応募については事務局までご連絡頂くか、下記を御覧下さい。
<http://www.city.civil.saitama-u.ac.jp/chsce/obo/obo.html>

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No.17
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 窪田 陽一
事務局 埼玉大学工学部 深堀 清隆
〒338-8570 埼玉県浦和市下大久保255
TEL 048-858-9549/FAX 048-858-7374
Email: fukahori@post.saitama-u.ac.jp
URL: <http://www.city.civil.saitama-u.ac.jp/chsce/newsletter.html>

CONTENTS

- NEWS		
Civil engineering heritages in Japanese modernization	BABA Syunsuke	1
-2000 valuable heritages of civil engineering		
- FORUM		
Restoration of Gosyonuma swamp -Landscape as symbol of land history	NAKAMURA Yoshio	2
- LOCAL NEWS		
Restoration of Dutch warehouses and quarters in Dejima	YOKOMURA Yoshie	3
- WHAT'S On		
The 6th forum on heritages of civil engineering		3
- OVERSEAS NEWS		
A lecture by Professor Antonie Picon	HASHIMOTO Mitsuyuki	4
- RELEVANT INSTITUTIONS		
The Society of R.H.Brunton in Inubosaki	NAKADA Hiroshi	5
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
The 21th conference of CHSCE		5
Meeting report	SUZUKI Kei	7
- BOOK GUIDE	YOKOMATSU Muneharu	8